

「あれ、みくるちゃんじゃない？」

「あ、涼宮さん」

場所は近所の本屋さん。

お料理の本を買いに来た私は、目的の本を手を持ちレジに並ぼうとしたところで同じようにレジに並ぶ涼宮さんと出会った。

その手には、『未来人は既にこの時代に来ている！』というタイトルの怪しげな本が握られていた。

お互いに会計を終わらせた私たちは、喫茶店でお茶をすることにした。

話題はもっぱら未来人のお話。

なんでも涼宮さんは『未来人は既にこの時代に来ている！』を少し立ち読みしただけでとても気に入ったらしい。

「やっぱり未来人はいるのよ、間違いないわ！」

大きな瞳を輝かせて、涼宮さんは断言した。

確かに、間違いはないんですけど。

「あの一、涼宮さんはどうしてそんなに未来人に会いたいんですかあ？」

「そんなの決まってるじゃない！面白いからよ！」

テーブル越しの私に、乗り出すように顔を近づけて話し始めた。

「だって、そうじゃない？未来人よ！すごく珍しいわ！」

「で、でも未来人って普通の人じゃないですか？」

それは私が以前から疑問に思っていたことだった。

「宇宙人や超能力者は、その、私たちには出来ないようなすごいことをできると思うんです」

「それで？」

「で、でも未来人は、住んでる時代が違うだけの普通の人で、

会えてもすごくないかもしれないじゃないですか」

私は、彼女や彼とは違う。

ただ違った時代から来たただのただの人で、向こうの時代じゃ珍しくもない普通の人。

もしも、正体が知られてしまったとき、真っ先に涼宮さんにいらないとと言われるのは私じゃないか、ずっと、そう思っていた。

涼宮さんは何も言わず、なにかを考えるような難しい顔をしていた。

時間にしては数秒の沈黙だけど、私にはすごく長いものを感じた。

やっぱり、未来人はいらないわね、そう言われるような気がして。

「みくるちゃん」

「ひゃ、ひゃい！？」

「やっぱり、未来人には一刻も早く会うべきよ！」

「へ？」

しかし涼宮さんが口にした言葉は、私の想像とは正反対だった。

「だって、普通の人ですよ？」

「普通の人じゃ昔なんかに来たら、きっとすごく心細いじゃない？」

だからこそ、我らSOS団が発見して仲良くなってあげないとね！」

涼宮さんの思いもよらぬ考えは、私には衝撃で、同時に、心の底から安心できるものだった。

私はいらなくない。

もしも正体が知られてしまっても、涼宮さんは私と一緒にいてくれるんだ。

それは私にとって、ずっと思い描いていたことで、ずっと不安なことだった。

「どうしたの？みくるちゃん、さっきからちょっと変よ」

だからだろうか、いつもより気が軽くて、とんでもない質問をしてしまったのは、

「あ、あの、もう一つ聞いていいですか？」

「なに？みくるちゃんになら何でも教えてあげるけど」

「私がもし、未来人だったら今よりもっと仲良くしてくれますか？」